

(昭和49年度)

② 新潟県における乳児突然死例の訪問調査研究

<分担研究者> 前研究第3部長 松島 富之助

(東京警察病院小児科)

<研究協力者>

梶島 史子

(新潟県衛生部)

I 緒言

新潟県における昭和47年, 48年の乳児突然死の疫学については, 昨年の本研究班の報告にすでにのべられ, その全文は日本総合愛育研究所紀要第10集¹⁾に掲載した通りである。

今回は, その後同じ症例について新潟県の保健婦の協力により, 家庭訪問を行ったので, その家庭における実態分析を行った結果を述べたい。

II 調査方法

1) 乳児突然死例の選出:

新潟県における昭和47, 48年の死亡小票の中で, 乳児死亡例から早期新生児例を除去し, 残った症例のうち, 本症に該当するもの及び該当するうたがいのあるもの(死亡までの時間が2~3時間以内のものなど)を抽出した結果21例が選び出された。昨年はその症例につき疫学的分析を行った。

保健婦による家庭訪問調査は, 全県保健所の協力の下に行われたが, 本症例の他に一酸化炭素中毒児(岡○美

○, 3カ月死亡)1例と, 死亡までに5時間かかった感冒性下痢症例(古○光○, 7カ月死亡, 新潟県中頸城郡板倉町大字長塚163の2例も加えた23例の分析を行った。

2) 調査用紙: 一略

III 調査成績並びに考按

1. 死亡月例(第1表)23例中2カ月代及び3カ月代が各々6例ずつで最も多く, ついで1カ月代及び7カ月代の3例ずつ, 0カ月代の2例の順であり, その他の月齢は少なかった。

とくに生後3カ月までの死亡が23例中17例(73.9%)と大半を占めていたことは, 従来の報告と同じ傾向で, とくに2~3カ月にピークがある点も, おおよそ同様の傾向を示している。

2. 性差はほぼ相半ばしていて, 従来の報告のように男児に多い傾向はみられなかった。

但し, 年次的にみると, 昭和47年には男児:女児=7:4で男児に多かったが, 昭和48年では男児:女児=4:8で逆転していたが, これは対象乳児の母数が少ないためと考えられる。

第1表 死亡月齢

年度	性	実数と%	0 } 30d	1M 30d	2M 30d	3M 30d	4M 30d	5M 30d	6M 30d	7M 30d	8M 30d	9M 30d	10M 30d	11M 30d	計
昭和47年	♂	N %	2 28.5	1 14.3	0	2 28.6	1 14.3	0	0	1 14.3	0	0	0	0	7 100.0
	♀	N %	0	0	3 75.0	0	0	1 25.0	0	0	0	0	0	0	4 100.0
	小計	N %	2 18.2	1 9.1	3 27.2	2 18.2	1 9.1	1 9.1	0	0	1 9.1	0	0	0	11 100.0

内藤他：乳児の突然死に関する研究

48年	♂	N %	0 25.0	1 25.0	1 25.0	1 25.0	0	0	0	1 25.0	0	0	0	0	4 100.0
	♀	N %	0 12.5	1 25.0	2 37.5	3 37.5	0	0	0	1 12.5	1 12.5	0	0	0	8 100.0
	小計	N %	0 16.7	2 25.0	3 33.3	4 33.3	0	0	0	2 16.7	1 8.3	0	0	0	12 100.0
計	♂	N %	2 18.2	2 18.2	1 9.1	3 27.2	1 9.1	0	0	2 18.2	0	0	0	0	11 100.0
	♀	N %	0 8.3	1 8.3	5 41.8	3 25.0	0	1 8.3	0	1 8.3	1 8.3	0	0	0	12 100.0
	合計	N %	2 8.7	3 13.0	6 26.2	6 26.2	1 4.3	1 4.3	0	3 13.0	1 4.3	0	0	0	23 100.0

第2表 死亡原因

年度	性	実数と% N %	窒息	心不全	炭酸中毒	先天性弱質	計	窒息						計
								吐乳吸引	フトン衣類	鼻出血	圧迫	その他	不明	
昭和47年	♂	N %	3 42.9	4 57.1	0	0	7 100.0	1 33.3	1 33.3				1 33.4	3 100.0
	♀	N %	3 75.0	1 25.0	0	0	4 100.0			1 33.3	1 33.3	1 33.4		3 100.0
	小計	N %	6 54.5	5 45.5	0	0	11 100.0	1 16.7	1 16.7	1 16.7	1 16.7	1 16.6	1 16.6	6 100.0
48年	♂	N %	1 25.0	1 25.0	1 25.0	1 25.0	4 100.0	1 100.0						1 100.0
	♀	N %	5 62.5	2 25.0	1 12.5	0	8 100.0	3 60.0	2 40.0					5 100.0
	小計	N %	6 51.0	3 25.0	2 16.7	1 8.3	12 100.0	4 66.7	2 33.3					6 100.0
計	♂	N %	4 36.4	5 54.4	1 9.1	1 9.1	11 100.0	2 50.0	1 25.0				1 25.0	4 100.0
	♀	N %	8 66.7	3 25.0	1 8.3	0	12 100.0	3 37.5	2 25.0	1 12.5	1 12.5	1 12.5		8 100.0
	合計	N %	12 52.2	8 34.8	2 8.7	1 4.3	23 100.0	5 41.8	3 25.0	1 8.3	1 8.3	1 8.3	1 8.3	12 100.0

3. 死亡原因：推定される死亡原因を聴取した結果は第2表の通りである。

1) 最も多いのは窒息の12例(52.2%)であり、ついで心不全の8例(34.8%)である。その他には一酸化炭酸中毒の2例、先天性弱質の1例であった。

2) 窒息の12例の分析(第2表)吐乳吸引が5例で窒息例の41.8%を占めて最も多く、ついでふとんや衣類による窒息が25%の順である。その他鼻腔からの出血や圧迫などが1例ずつみられた。

3) しかし本症例は第3表の如く、解剖されたものは1

例(4.3%)にしきみられなかったので、乳児突然死の真相を伝えているとはいえないであろう。

第3表 解剖の有無

年度	性	実数と%	有	無	記なし	計
昭和47年	♂	N %	0	7 100.0		7 100.0
	♀	N %	0	4 100.0		4 100.0
	小計	N %	0	11 100.0		11 100.0
48年	♂	N %	0	4 100.0		4 100.0
	♀	N %	1 12.5	7 87.5		8 100.0
	小計	N %	1 8.3	11 91.7		12 100.0
計	♂	N %	0	11 100.0		11 100.0
	♀	N %	1 8.3	11 91.7		12 100.0
	合計	N %	1 4.3	22 95.7		23 100.0

4. 死亡原因と直接の関連のある因子分析

1) 身体的異常

(1) 奇形の保有率は第4表の如く23例中1例(4.3%) (先天性心疾患の疑い) にすぎなかった。

第4表 奇形の有無

年度	性	実数と%	有	無し	記なし	計
昭和47年	♂	N %		6 85.7	1 14.3	7 100.0
	♀	N %		4 100.0		4 100.0
	小計	N %		10 90.9	1 9.1	11 100.0
	♂	N %		4 100.0		4 100.0

48年	♀	N %	1 12.5	7 87.5		8 100.0
	小計	N %	1 8.3	11 91.7		12 100.0
計	♂	N %		10 90.9	1 9.1	11 100.0
	♀	N %	1 8.3	11 91.7		12 100.0
	合計	N %	1 4.3	21 91.4	1 4.3	23 100.0

(2) 死亡前に著明な身体的異常のあったものは第5表の如く23例中7例(30.4%)である。

第5表 著明な身体異常の有無

年度	性	実数と%	有	無し	記なし	計
昭和47年	♂	N %	3 42.9	3 42.8	1 14.3	7 100.0
	♀	N %		4 100.0		4 100.0
	小計	N %	3 27.3	7 63.6	1 9.1	11 100.0
48年	♂	N %	1 25.0	3 75.0		4 100.0
	♀	N %	3 37.5	5 62.5		8 100.0
	小計	N %	4 33.3	8 66.7		12 100.0
計	♂	N %	4 36.4	6 54.5	1 9.1	11 100.0
	♀	N %	3 25.0	9 75.0		12 100.0
	合計	N %	7 30.4	15 65.3	1 4.3	23 100.0

① その内容は第6表の如く発熱(2例), 咳(2例), 嘔吐(2例), 及びその他(1例)であった。

② その症状の発現の死亡までの期間は第7表の如く死亡前1週間以内(2例), 3週以内(2例), 及び1カ月以内(2例), 2週以内(1例)とまちまちであ

ったが、それらが死亡に直接関係するぐらいの重症のものではなかった。

第6表 著明な身体的異常の内容

年度	性	実数と% N %	不気嫌 発熱	咳	嘔吐	その他	記なし	計
昭和47年	♂	N % 2 66.7				1 33.3		3 100.0
	♀	N %		1 50.0			1 50.0	2 100.0
	小計	N %	2 40.0	1 20.0		1 20.0	1 20.0	5 100.0
48年	♂	N %				1 100.0		1 100.0
	♀	N %		1 50.0	1 50.0			2 100.0
	小計	N %		1 33.3	2 66.7			3 100.0
計	♂	N %	2 50.0		1 25.0	1 25.0		4 100.0
	♀	N %		2 50.0	1 25.0		1 25.0	4 100.0
	合計	N %	2 25.0	2 25.0	2 25.0	1 12.5	1 12.5	8 100.0

第7表 症状の発現

年度	性	実数と% N %	死亡前1 W 以内	2 W "	3 W "	1 M "	記なし	計
昭和47年	♂	N %		1 33.3	1 33.3	1 33.4		3 100.0
	♀	N %	1 50.0			1 50.0		2 100.0
	小計	N %	1 20.0	1 20.0	1 20.0	2 40.0		5 100.0
48年	♂	N %			1 100.0			1 100.0
	♀	N %	1 100.0					1 100.0

小計	N %	1 50.0		1 50.0		2 100.0
計	♂	N %	1 25.0	2 50.0	1 25.0	4 100.0
	♀	N %	2 66.7		1 33.3	3 100.0
	合計	N %	2 28.6	1 14.2	2 28.6	2 28.6

(3) 死亡前1ヵ月以内の症状は第8表の如く何らの症状のみられなかったものは、23例中16例(69.6%)と大半を占めた。

症状のあるものの内容は、かぜ気味なのが3例(13%)喘鳴2例(8.7%)であり、2例はその他の症状(下痢など)であった。

第8表 死亡前1ヵ月以内の症状

年度	性	実数と% N %	無し	風邪	ぜいぜい	喘息	その他	計
昭和47年	♂	N %	4 57.1		1 14.3		2 28.6	7 100.0
	♀	N %	2 50.0	1 25.0	1 25.0			4 100.0
	小計	N %	6 54.5	1 9.1	2 18.2		2 18.2	11 100.0
48年	♂	N %	3 75.0	1 25.0				4 100.0
	♀	N %	7 87.5	1 12.5				8 100.0
	小計	N %	10 83.3	2 16.7				12 100.0
計	♂	N %	7 63.6	1 9.1	1 9.1		2 18.2	11 100.0
	♀	N %	9 75.0	2 16.7	1 8.3			12 100.0
	合計	N %	16 69.6	3 13.0	2 8.7		2 8.7	23 100.0

(4) 生下時体重

Bergman²⁾をはじめ多くの研究者は、低体重児に本症例が多いことを指摘している。

しかし、われわれの症例では2,500g以下のいわゆる低体重児は23例中2例(8.6%)にすぎず必ずしも低体重児に多いとはいえなかった。(第9表)

第9表 生下時体重(g)

年度	性	実数と% 以下	2,000	2,001	2,501	3,001	3,501	4,000	計
			以下	2,500	3,000	3,500	4,000	以上	
昭和47年	♂	N			4	3			7
	♀	%			57.1	42.9			100.0
	小計	N			6	5			11
48年	♂	N			2	2			4
	♀	%			50.0	50.0			100.0
	小計	N			6	5			11
計	♂	N			6	5			11
	♀	%	12.5	12.5	25.0	33.4	16.7	8.3	100.0
	小計	N	1	1	3	4	2	1	12
計	♂	N			6	5			11
	♀	%	8.3	8.3	25.0	33.4	16.7	8.3	100.0
	合計	N	1	1	9	9	2	1	23
		%	4.3	4.3	39.2	39.2	8.7	4.3	100.0

(6) 体質異常の1つとして湿疹の有無を検索した結果は第10表の如く、湿疹のあったものは23例中3例(13.0%)にすぎなかった。

第10表 湿疹の有無

年度	性	実数と%	有り	無し	記なし	計
昭和47年	♂	N		6	1	7
	♀	%		85.7	14.3	100.0
	小計	N	1	9	1	11
		%	25.0	81.8	9.1	100.0
48年	♂	N		4		4
	♀	%		100.0		100.0
	小計	N	2	6		8
		%	25.0	75.0		100.0
計	♂	N		10	1	11
	♀	%		90.9	9.1	100.0
	合計	N	3	9		12
		%	25.0	75.0		100.0
	合計	N	3	19	1	23
		%	13.0	82.7	4.3	100.0

5. 乳児突然死の発生への因子分析

1) 死亡時刻:(第11表)

諸家の報告はAM0~6が圧倒的に多いというが、本調査ではこの時間は23例中8例(36.1%)でやや多いとしかいえなかった。

ついで多いのはPM0~6の7例(30.4%), PM7~12の5例(21.7%)の順であり、PM6~12の3例(13.0%)と最も少なかった。

第11表 死亡時刻

年度	性	実数と%	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11
			AM													PM										
昭和47年	♂	N		1				1	1				1	1												
	♀	%		14.3				14.3	14.3				14.3	14.3												
	小計	N		1	1			2	1			1	1	1												
		%		9.1	9.1			18.1	9.1			9.1	9.1	9.1												

第13表 死亡季節

年度	性	実数と% N %	1月	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	計
昭和47年	♂	N %			2 28.6		1 14.3		1 14.3			2 28.5	1 14.3		7 100.0
	♀	N %			1 25.0			2 50.0	1 25.0						4 100.0
	小計	N %			3 27.2		1 9.1	2 18.2	2 18.2			2 18.2	1 9.1		11 100.0
48年	♂	N %	1 25.0	1 25.0								1 25.0	1 25.0	1 25.0	4 100.0
	♀	N %			1 12.5	1 12.5			2 25.0			1 12.5	1 12.5	2 25.0	8 100.0
	小計	N %	1 8.3	1 8.3	1 8.3	1 8.3			2 16.7			2 16.7	1 8.3	3 25.1	12 100.0
計	♂	N %	1 9.1	1 9.1	2 18.2		1 9.1		1 9.1			3 27.2	1 9.1	1 9.1	11 100.0
	♀	N %			2 16.7	1 8.3		2 16.7	3 25.0			1 8.3	1 8.3	2 16.7	12 100.0
	合計	N %	1 4.3	1 4.3	4 17.4	1 4.3	1 4.3	2 8.7	4 17.5			4 17.5	2 8.7	3 13.0	23 100.0

第14表 発見時の姿勢

年度	性	実数と% N %	うつ伏せ	仰むけ	横むき	その他	記なし	計
昭和47年	♂	N %	1 14.3	5 71.4	1 14.3			7 100.0
	♀	N %		3 75.0	1 25.0			4 100.0
	小計	N %	1 9.1	8 72.7	2 18.2			11 100.0
48年	♂	N %		3 75.0			1 25.0	4 100.0
	♀	N %	1 12.5	4 50.0		1 12.5	2 25.0	8 100.0
	小計	N %	1 8.3	7 58.4		1 8.3	3 25.0	12 100.0
	♂	N %	1 9.1	8 72.7	1 9.1		1 9.1	11 100.0

計	♀	N %	1 8.3	7 58.4	1 8.3	1 8.3	2 16.7	12 100.0
合計	N %	2 8.7	15 65.3	2 8.7	1 4.3	3 13.0	23 100.0	

従来の報告や前回の内藤、松島³⁾の東京都、川崎市及び埼玉県(昭和47年調査)の調査では人工乳の方が約2倍多い結果からみると、今回の差のない原因はよくわからないが、例数の少ないためかもしれない。

(2) しかも、生後1週における栄養方法(第15表)をみると、必ずしも母乳栄養児に本症が少ないともいえない点、再検討を要するかもしれない。

内藤他：乳児の突然死に関する研究

第15表 栄養方法

年 度	性	実数と% N %	生 後				計	生 後				計	死亡時					計
			1W 母乳	混合	人工	不明		3カ 月乳	後 混合	人工	不明		母 乳	混合	人工	離乳食	不明	
昭和 47年	♂	N 3 % 42.8	2 28.6	2 28.6		7 100.0	1 25.0	1 25.0	1 25.0	4 25.0	4 100.0	3 42.9		3 42.9		1 14.2	7 100.0	
	♀	N 1 % 25.0	3 75.0			4 100.0		2 66.7	1 33.3		3 100.0		3 75.0	1 25.0			4 100.0	
	小計	N 4 % 36.4	5 45.4	2 18.2		11 100.0	1 14.3	3 42.9	2 28.6	1 14.3	7 100.0	3 27.3	3 27.3	4 36.3		1 9.1	11 100.0	
48年	♂	N 2 % 50.0	1 25.0	1 25.0		4 100.0		2 66.7	1 33.3		3 100.0	1 25.0	2 50.0	1 25.0			4 100.0	
	♀	N 1 % 12.5	2 25.0	4 50.0	1 12.5	8 100.0		2 33.3	4 66.7		6 100.0		2 22.2	5 55.6	2 22.2		9 100.0	
	小計	N 3 % 25.0	3 25.0	5 41.7	1 8.3	12 100.0		4 44.4	5 55.6		9 100.0	1 7.7	4 30.8	6 46.1	2 15.4		1 100.0	
計	♂	N 5 % 45.4	3 27.3	3 27.3		11 100.0	1 14.3	3 42.8	2 28.6	1 14.3	7 100.0	4 36.3	2 18.2	4 36.4		1 9.1	13 100.0	
	♀	N 2 % 16.7	5 41.7	4 33.3	1 8.3	12 100.0		4 44.4	5 55.6		9 100.0		5 38.5	6 46.1	2 15.4		1 100.0	
	合計	N 7 % 30.4	8 34.9	7 30.4	1 4.3	23 100.0	1 6.3	7 43.7	7 43.7	1 6.3	16 100.0	4 16.7	7 29.2	10 41.6	2 8.3	1 4.2	2 100.0	

第16表 新潟県4カ月児の栄養方法（昭和48年）

	市 街 地	過 疎 地
母 乳	17.0 %	15.0 %
混 合	30.0 %	33.0 %
人 工	53.0 %	52.0 %

6. 本症と家庭環境との関係

(1) 家庭の主な職業（第17表）

最も多いのはブルーカラーが23例中9例（39.3%）と最も多く、ついで自営業7例（30.4%）であり、他の職業は比較的少なかった。とくにこの地区に多い農業関係に本症が少なく、農業は2例（8.7%）兼業0例と少ない点に注目したい。

第17表 家庭のおもな職業

年 度	性	実数と% N %	専 業 農	兼 業 農	自 営 業	い わ ゆる ホ ワ カ イ ト	い わ ゆる ブル カ ラ	臨 時 日 雇 い	そ の 他	記 念 無 し	計
昭和 47年	♂	N 1 % 14.3			2 28.6	1 14.3	2 28.5			1 14.3	7 100.0
	♀	N %					4 100.0				4 100.0
	小計	N 1 % 9.1			2 18.2	1 9.1	6 54.5			1 9.1	11 100.0

48年	♂	N %	1 25.0		2 50.0	1 25.0				4 100.0	
	♀	N %			3 37.5	1 12.5	3 37.5		1 12.5	8 100.0	
	小計	N %	1 8.3		5 41.7	2 16.7	3 25.0		1 8.3	12 100.0	
計	♂	N %	2 18.2		4 36.4	2 18.2	2 18.2			1 9.1	11 100.0
	♀	N %			3 25.0	1 8.3	7 58.4		1 8.3		12 100.0
	合計	N %	2 8.7		7 30.4	3 13.0	9 39.3		1 4.3	1 4.3	23 100.0

(2) 生活レベルを保健婦の印象により記入させたが第18表の如く中等度が23例中20例(87.0%)と圧倒的に多く、従来の報告のように低クラスに多いものではなかった。

(3) 母親の知的印象を保健婦に記載させたが第19表の如く、中が大半を占めていて82.6%、下は17.4%で上は、みられなかった。

本症が社会経済的に低階層の家庭に多発するとの報告は極めて多いが、本調査ではその傾向はみられなかった。

第18表 生活レベル

年度	性	実数と%	上	中	下	記なし	計
昭和47年	♂	N %		6 85.7	1 14.3		7 100.0
	♀	N %		3 75.0	1 25.0		4 100.0
	小計	N %		9 81.8	2 18.2		11 100.0
48年		N %		4 100.0			4 100.0
		N %	1 12.5	7 87.5			8 100.0
	小計	N %	1 8.3	11 91.7			12 100.0
計	♂	N %		10 90.9	1 9.1		11 100.0
	♀	N %	1 8.3	10 83.4			12 100.0
	合計	N %	1 4.3	20 87.0	2 8.7		23 100.0

第19表 知的印象(母親の)

年度	性	実数と%	上	中	下	記なし	計
昭和47年	♂	N %		7 100.0			7 100.0
	♀	N %		2 50.0	2 50.0		4 100.0
	小計	N %		9 81.8	2 18.2		11 100.0
48年	♂	N %		2 50.0	2 50.0		4 100.0
	♀	N %		8 100.0			8 100.0
	小計	N %		10 83.3	2 16.7		12 100.0
計	♂	N %		9 81.8	2 18.2		11 100.0
	♀	N %		10 83.3	2 16.7		12 100.0
	合計	N %		19 82.6	4 17.4		23 100.0

内藤他：乳児の突然死に関する研究

(4) 家族構成は第20表の如く、複合家族が23例中13例(56.4%)とやや多いが、特に多いわけではない。

核家族で同胞のあるもの(核家族Ⅱ)が8例(34.9%)、父母と同胞の他に祖父母のいるもの(複合家族Ⅱ)が7例(30.4%)と比較的多く、また複合家族Ⅱにその他の人々がいるもの(複合家族Ⅲ)が5例(21.7%)にみられたが、一人っ子の家族及び一人っ子に祖父母のいる家族に本症が極めて少ない点は注目に値する。

第20表 家族構成

年 度	性	実数と%	核 家 族			複 合 家 族			計
			I	II	III	I	II	III	
昭和 47年	♂	N %	1 14.3	4 57.1		2 28.6		7 100.0	
	♀	N %		1 25.0		1 25.0	2 50.0	4 100.0	
	小計	N %	1 9.1	5 45.4		3 27.3	2 18.2	11 100.0	
48年	♂	N %			1 25.0	3 75.0		4 100.0	
	♀	N %	1 12.5	3 37.5		1 12.5	3 37.5	8 100.0	
	小計	N %	1 8.3	3 25.0	1 8.3	4 33.4	3 25.0	12 100.0	
計	♂	N %	1 9.1	4 36.4	1 9.1	5 45.4		11 100.0	
	♀	N %	1 8.3	4 33.3		2 16.7	5 41.7	12 100.0	
	合計	N %	2 8.7	8 34.9	1 4.3	7 30.4	5 21.7	23 100.0	

(6) 住居様式

① 住居の種類は第21表の如く23例中18例(78.3%)と大半が独立家屋である。

第21表 住居の種類

年 度	性	実数と%	独立家屋	ア パ ー ト		計
				木造	鉄筋	
昭和 47年	♂	N %	5 71.4	0	2 28.6	7 100.0
	♀	N %	3 75.0	1 25.0	0	4 100.0

48年	小計	N %	8 72.7	1 9.1	2 18.2	11 100.0
	♂	N %	3 75.0	1 25.0	0	4 100.0
	♀	N %	7 87.5	1 12.5	0	8 100.0
計	♂	N %	8 72.7	1 9.1	2 18.2	11 100.0
	♀	N %	10 83.3	2 16.7	0	12 100.0
	合計	N %	18 78.3	3 13.0	2 8.7	23 100.0

アパート居住者の5例は2階居住者がほとんどを占めていた(第22表)。

第22表 アパート階層

年 度	性	実数と%	1 F	2 F	3 F	4 F	5 F以上	記 な し	計
	♀	N %		1 100.0					1 100.0
	小計	N %		3 100.0					3 100.0
48年	♂	N %		1 100.0					1 100.0
	♀	N %					1 100.0		1 100.0
	小計	N %		1 50.0			1 50.0		2 100.0
計	♂	N %		3 100.0					3 100.0
	♀	N %		1 50.0			1 50.0		2 100.0
	合計	N %		4 80.0			1 20.0		5 100.0

② 部屋数は第23表の如く6部屋以上が39%と最も多く、ついで4部屋が21.1%と多い。2部屋及び5部屋あるものも13%ずつあって、1室は僅かに4.3%に過ぎなかった。3部屋以下は23例中5例(21.6%)と少ない点からみても、東京都、埼玉、川崎地区での前回の調査(部屋数の少ないものに多発)の結果と異なっていた。

第23表 部屋数

年度	性	実数と%	1室	2	3	4	5	6室以上	記なし	計
昭和47年	♂	N %		3 42.8	1 14.3		3 42.9			7 100.0
	♀	N %	1 25.0		1 25.0	1 25.0	1 25.0			4 100.0
	小計	N %	1 9.1	3 27.3	2 18.2	1 9.1	4 36.3			11 100.0

48年	♂	N %			1 25.0	1 25.0	2 50.0		4 100.0	
	♀	N %		1 12.5	2 25.0	1 12.5	3 37.5	1 12.5	8 100.0	
	小計	N %		1 8.3	3 25.0	2 16.7	5 41.7	1 8.3	12 100.0	
計	♂	N %			3 27.3		2 18.2	1 9.1	5 45.4	11 100.0
	♀	N %	1 8.3		1 8.3	3 25.0	2 16.7	4 33.4	1 8.3	12 100.0
	合計	N %	1 4.3	3 13.0	4 33.3	1 8.3	5 45.4	9 75.0	1 8.3	23 100.0

③ 部屋の広さ

部屋の広さは第24表の如く、30畳以上の例が多く(23例中14例((61.0%))みられ、部屋の狭さとの関連はあまりみられなかった。

第24表 部屋の広さ

年度	性	実数と%	6畳以下	9	12	15	20	25	30	31	記なし	計
昭和47年	♂	N %			2 28.6		1 14.3	1 14.3		3 42.8		7 100.0
	♀	N %	1 25.0						2 50.0	1 25.0		4 100.0
	小計	N %	1 9.1		2 18.2		1 9.1	1 9.1	2 18.2	4 36.4		11 100.0
48年	♂	N %						1 25.0	1 25.0	2 50.0		4 100.0
	♀	N %					1 12.5	1 12.5	2 25.0	3 37.5	1 12.5	8 100.0
	小計	N %					1 8.3	2 16.7	3 25.0	5 41.7	1 8.3	12 100.0
計	♂	N %			2 18.2		1 9.1	2 18.2	1 9.1	5 45.6		11 100.0
	♀	N %	1 8.3				1 8.3	1 8.3	4 33.4	4 33.4	1 8.3	12 100.0
	合計	N %	1 4.3		2 8.7		2 8.7	3 13.0	5 21.7	9 39.3	1 4.3	23 100.0

(6) 保育関係

① 主な保育者は第25表の如く、母親が23例中18例(78.3%)と大半を占めていて、祖母は4例(17.4%)にすぎなかった。

第25表 主な保育者

年度	性	実数と%	母親	祖母	その他	記なし	計
昭和47年	♂	N %	6 85.7	1 14.3			7 100.0
	♀	N %	3 75.0		1 25.0		4 100.0
	小計	N %	9 81.8	1 9.1	1 9.1		11 100.0
48年	♂	N %	4 100.0				4 100.0
	♀	N %	5 62.5	3 37.5			8 100.0
	小計	N %	9 75.0	3 25.0			12 100.0
計	♂	N %	10 90.9	1 9.1			11 100.0
	♀	N %	8 66.7	3 25.0	1 8.3		12 100.0
	合計	N %	18 78.3	4 17.4	1 4.3		23 100.0

IV 結論

昭和47~48年における新潟県下の乳児突然死例23例につき、その発生因子を分析する目的で、市町村保健婦による家庭訪問調査を行った結果、

- 1) 死亡月齢は3カ月以内が73.9% (23例中17例)と大半を占め、とくに2~3カ月にピークがあった。
- 2) 性差はみられなかった。
- 3) 死亡原因は窒息が52.2% (23例中12例)と最も多く、ついで心不全が34.8% (8例)であったが、解剖されたものは僅かに1例にすぎなかったので、死因の詳細な分析がなされていない点に問題があった。
- 4) 本症例児は死亡前に嘔吐、発熱、咳などの症状を有したものが約30%にみられ、その症状は死亡前1カ

月以内にみられた。

- 5) 低体重児は非常に少なかった。(23例中2例)
 - 6) その他の異常(奇形、湿疹など)をもつ症例も少なかった。
 - 7) 死亡時刻はAM0~6、及びPM0~6にやや多かったが、特にその時間帯に多発しているのではない。
 - 8) 死亡季節は特定傾向はないが、8、9月にみられず、3、7、10及び12月に多い傾向を示している。
 - 9) 死亡発見時は仰臥位が多く腹位は少なかった。
 - 10) 栄養方法は人工栄養児に多いが、各栄養方法の母数を考慮に入れると、とくに人工栄養に多くて母乳栄養に少ないという差はみられなかった。
 - 11) 家族の職業はブルーカラー及び自営業にやや多い傾向があったが、農業に少ない点が特異であった。
 - 12) 生活レベル及び知的レベルは中等度のものが多かった。
 - 13) 家族構成及び住居構成には特記するものが少なく、住居も広いものが多かった。
- 以上の結果から
- 農村地区を多有する地方である新潟県における乳児突然死の発生に関連のある因子分析は、東京、川崎、埼玉地区のような都市型の地区と異なる点が多いことがわかったので、今後その分析の必要性があろう。
- そして、そのことが本県における昭和47、48年の本症の発生頻度の低さ(乳児1万対2.76人、東京地区1万対6.05人、埼玉県5.29人、川崎市5.67人)の分析につながるものと考えられる。
- また本症の解剖率が4.3%と極めて低い点も今後の研究の隘路となる点を強調したい。

文 献

- 1) 内藤寿七郎、松島富之助：新潟県と鳥取県における乳児突然死の疫学に関する研究：日本総合愛育研究所紀要第10集(昭和49年10月)213~218頁
- 2) A.B. Bergman et al.: Sudden Infant Death Syndrome, Univ. of Washington Press, 1970.
- 3) 内藤、松島：乳児の突然死の疫学に関する研究：日本総合愛育研究所紀要第9集31~49頁。1973.